

カラーで見る電鍵の世界

モールス・キー

Morse Key Collection

コレクション



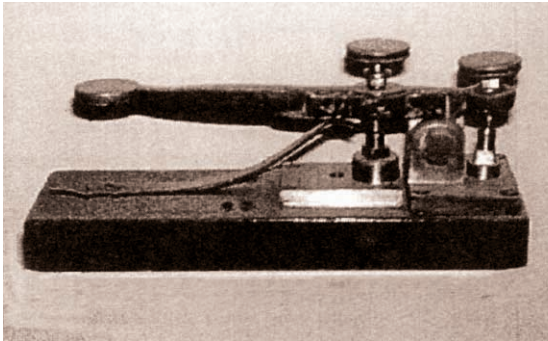
モールス通信の揺籃期から現代までに製作されたモールス・キーを紹介します。
それぞれの電鍵は、実際にモールス符号が奏でられた歴史ある品々です。

HI-MOUND MARCONI 火花送信機電鍵（記念用）

1995年、電気通信100年を記念して限定生産されたもので、形状は信濃丸に搭載された36式無線電信機用のキーを模倣したもの。重量は約4kg、キーとしてはかなり大型の部類になる。

歴史的なモールス・キー

モールス符号の誕生とともに製作された第一号のキーから、歴史的な出来事に関連したモールス・キーを5点に絞り込んで紹介します。いずれも電信が当時、いろいろな分野で活用されていたことを物語っています。



電信の開通後、実際の通信現場での使用を考慮し、耐久性を上げるため Correspondent に改良を加えたもの。ペイルが“Lever Correspondent”と命名し、1848年頃から実際の通信現場へ普及した。この頃はまだキーのつまみは付いていない。



1905(明治38年)5月27日未明、ロシアのバルチック艦隊と日本の連合艦隊との日本海海戦の幕は切って落とされた。仮巡洋艦信濃丸が「敵艦見ゆ」とバルチック艦隊の動きを無線電信で打電したとき、本キーが使用され、海軍の36式無線電信機によって発信された。
<三笠保存会蔵>

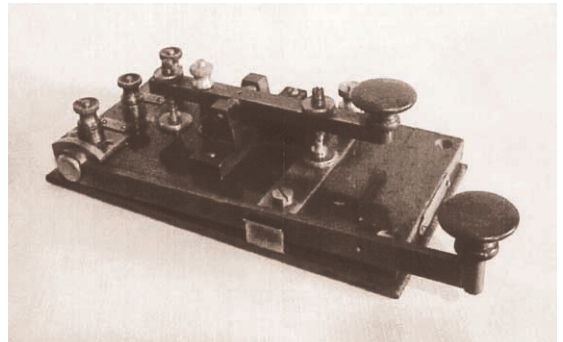


1844年5月24日、Washington - Baltimore間に世界で初めて電信が開通したとき、モールスの助手ペイルが開通式に間に合わせるために急きょ作り上げた“Correspondent”と呼ばれる世界最初のモールス・キー。キーとしてはあら削りのものであったが、このキーによってモールス符号による世界最初のメッセージが伝送された。



1854年(安政元年)、ペリーの来航時、将軍に献上したエンボシング・モールス電信機に用いられているキーで、1856年頃まで使用された。手指を机の上に置いて打つのに適したアメリカン・タイプの原型で、復帰バネに板バネを使用している。

<通信総合博物館蔵>



1912年(明治45年)4月14日未明、イギリスからニューヨークへ向かう途中、氷山に追突して沈没した「MGY」のコールサインを持つタイタニック号(46,348トン)は、約1,500名の人名を失うという大惨事になった。本キーはその際、CQDX(SOS)の打電に用いられたサイド・レバー付きのキーで、マルコーニ社の5kWロータリー・コンバータ式火花送信機から発信された。